

春の陽射しを浴びながら 山を眺めていると思い出が頭をよぎる

雪解け水が温み、気温も心地よくなつてくると、田植えの季節を迎える。真っ白い鳥海山を背景に田植えの作業が進む小滝でも、今年の秋、本格的に販売される「サキホコレ」の作付けをするのだろうか。「奈曽の白滝」が流れ落ちる小滝地区は、海岸寄りの象潟から百七十メートルほど標高が高く、里山の風情が色濃く残っている。春の陽差しを浴びながら鳥海山を眺めていると、数々の思い出が頭をよぎる。

高校の夏休みに鳥海山へ登った時、下山途中に、三合目のバス停で待っている、バスは来なかったのだ。日没が過ぎ、途方に暮れていたところにバイクで人が通りかかり、タクシーへの連絡をお願いして、助かったことがあった。地元新聞の投稿欄にそのことを郵送すると、記者から「バイクの人にお礼を」と提案され、矢島へ行ってお礼をした事が社会面に載ったのだ。当日の朝、教員室に呼び出され「登山の許可は出していたのか」と厳しく叱られた。憤慨したのは、教師は自分の体面を保つことだけで、生徒の身の安全に関心はないと思えたからだ。

小滝から南東へ二十五キロメートルの地点で、「鳥海山ダム」の建設工事が施工されているが、その影響で「百宅」という集落が水没しようとしている。「法体の滝」のある細長い盆地は、鳥海山と茅茸民家が一体に撮影できる大切な場所であった。六

年後にダムは完成するらしいが、平安時代から続くという「百宅」の歴史が、間もなく閉ざされるのだ。ここには感慨深い記憶が残っている。旬の山菜料理を作ってくれた九十四歳の女性から、「百宅」の生活史を聞いたのだ。山村で生き抜くために、衣食住のあらゆる部分が自給自足の状態であったというが、夏至の夕暮れ時に撮影した古民家にも、その特徴があった。夏なのに、軒下に組まれた雪囲いの丸太は外されることなく、積雪が四メートルに達する冬の厳しさを物語っていた。

登山に加え、撮影、ロケハン、山菜やキノコ採りなど、鳥海山麓には多くの思い出が残っている。